

畧
解
本朝三字經

全

134
一
二
六
三
一
冊
號
架
兩

一
二
六

本

全
一
冊

本朝三字經

我^カ日本^ハ

一^{アル}稱^ハ和^{スヤマトノ}

地^チ膏^{コウ}腴^ニ

生^シ嘉^カ禾^ヲ

人^ニ勇^{ユウ}敢^{カン}

長^ス千^ニ戈^ニ

衣^イ食^シ足^{リテ}

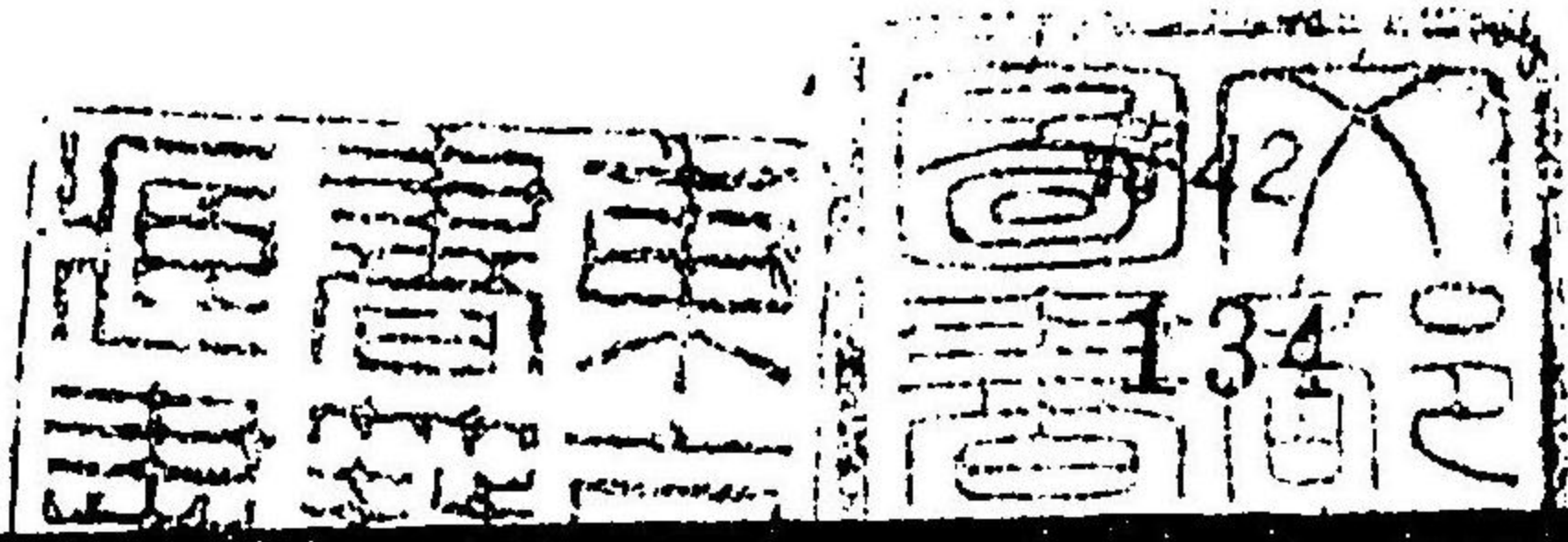
貨^カ財^{サイ}多^シ

昔^シ神^{シン}武^ブ

開^キ疆^{キョウ}域^ヲ

一^ニ天^{テン}下^ヲ

創^テ建^{ケン}國^ヲ



四ノ

有國風

曰和歌

辭婉麗

可吟哦

如神功

犯矢鉞

征二韓

成附庸

收貢物

討不共

仁德仁

皇弟賢

互遜位

及三年

弟自殺

仁德傳

帝矜民

察炊煙

曆天文

百濟來

立憲法

聖德裁

至文武

文學盛

設大學

教德行

始釋奠

祭先聖

日本紀

三十卷

千餘年

舍人選

仲麻呂

聘于唐

稱朝衡

友李王

在異域

其名芳

孝謙時

詔萬民

讀孝經

孝道新

桓武朝

有對策

試人才

舉巨擘

弘仁人

有非常

釋空海

小野篁

菅名家

出菅公

公文學

冠日東

紀貫之

古今集

順和名

所不及

書道風

及佐理

併行成セテ

三蹟美

清與紫

才女子

著源氏シ

作雙紙ル

道長奢テ

不脩德メ

藤氏盛ナル

至此極テニマル

博學名ハ

江匡房

義家學ニテ

察雁翔ス

平重盛ハ

可謂仁ト

事父孝ニ

事君純ニ

憂君父テ

忘其身ヲ

平氏亾ル

失斯人ハナカ

源賴朝

執朝政リ

皇綱解ケテ

將權盛ク

東鑑者

鎌倉史

述事實ヲ

見滅否ス

北條氏

有泰時

克其欲

去其私

定式目

寓箴規

後醍醐

親執政

雖南遷

皇統正

正成賢

能用兵

盡精忠

如孔明

予正行

尋北征

父子志

雖不成

同天地

存美名

尊氏興

以忤力

及其亂

骨肉食

六十州

終分裂

相抗衡

戰不輟

至信長

殆少康

滿招損

覆筭弒

秀吉智

雖無比

厚稅歛

耽奢侈

好戰伐

役多士

其家亾

無孫子

積善家

有餘慶

積不善

有餘殃

憂勞興

逸與亡

慎厥終

靡不康

盛衰理

人事彰

讀之者

冀勿忘

本朝三字經終

右本朝三字頗不知何人撰成云云友大橋
 訥菴所化也本島與一日香好形其福為
 加重加俚解易閱之有一二不可讀者則訂之
 令門生曾根水江信里為自一校以直其案矣

癸酉八月

隱士汲古

略解

我日本	本の名ハ大ハ洲國又若系乃中津國豊秋 津洲もり日本と名付らるる	一
稱和	大和ハ一國名也久しき帝都 多し皇國乃惣名も多し	地
膏腴	土肥テ物産に富み穀世也 勝馬社ハ水穂國と云り	人
勇敢	人乃心法よくいし 武技軍旅に堪る	衣食
貨財多	銅鐵宝貨多し 金銀	昔神武
中尊と	關疆域一 天下	日向乃都より大和國に伐入 長賜彦といふ人を亡し

ニ一ノ一ニ一

五姓とくありてよきよしを
殺し去の下を多しりガ

創建國

大和國十所郡成火乃
檀原宮又帝位より

有國風
曰和歌

吾社津鳴の國風を
やまとうるとり

辭嫁麻

可嗟哉

神も人もろむを責は
都雅あり

如神功

御名をハ
息長豆姫

尊と申す
仲哀帝乃皇后
應神帝乃御母

祀矢鋒

征三韓

仲哀帝
尚河

てのち軍艦を造り
親ら軍兵を率の新羅を討たも
り一は國王を討ち

降参し高麗百濟も従ひ
三韓のそめら海外
たひきまはり附庸とハ属國を

三韓とりの

成附庸

新羅ハ毎年二十艘の貢を
てありりつこの國も税賦を

り
収貢物

討不共

新羅ハ毎年二十艘の貢を
てありりつこの國も税賦を

あまは征まら

仁徳仁

仁徳帝ハ應神帝乃皇子
即名を大鶴鶴尊と申

皇

弟賢

仁徳帝吳母御弟即名を宇治推郎子尊と申す
應神帝御寵愛ありて子よりとち後

互

遜位及三年

應神帝御崩御なると推郎子即位
仁徳帝ハ讓多し三年を空位くみたり

弟自殺
仁徳傳

推郎子
仁徳帝乃敵意か
知ると自殺し
後仁徳帝乃實

帝
帝

帝

案炊煙

仁徳帝民乃實
仁徳三年を
課役をゆ

仁徳帝の所
時平公の仁徳帝を
仁徳帝の所
時平公の仁徳帝を

仁徳帝の所
時平公の仁徳帝を

仁徳帝の所
時平公の仁徳帝を

をよむにちのち今をよむると
よむにちのち今をよむると

曆天文

百濟東

吾国
上古

は曆と用カシム所ニハ世即時日月纏度と
うふ書 儒學乃書とも百濟より 書抄り

立憲法

聖徳裁

聖徳太子ハ用明帝の皇子 推古帝の太子多て撰
改り改り御名を厩戸武豊聰耳とも申さる

世太子十七ヶ條の憲
法を制らざる

至文武
文學盛

文武帝ハ天武
帝乃御孫御名

を 天眞宗豊祖天皇と申せ此御代の
頃より 尊賢又 遺學と云ふを申しさる

設大學

教徳

行 大學寮とて天下の學士を養ふ所也世頃より連らむる
吾国忠孝の通ハ表より 儒をりまむるを 經細よ行ハ教らる

始釋

奠祭先聖

釋奠と云ハ二月土月上丁日本學寮名を孔子以下九
概をまつらるるを先聖と云ふ孔子之類也先師と

日本紀

二十卷

元正天皇養老四年五月舍人親王
日本紀卅卷系圖一巻を養上し給

千餘年

天地乃開闢より 持統天皇の御讓位まで
を記ある神代卷ハおぼし 神武天皇の元年

乃事跡なるなる

舍人撰

舍人親王ハ天武帝弟三乃
皇子 謚を崇道盡敬皇帝と

申せ山城国伏見
藤森ハ其灵社也

仲麻呂

阿部朝臣仲麻呂ハ中務大輔船守子
年十六外へて遣唐留學生トなる

聘于唐

唐より 玄宗肅宗日仕ハ秘書
監とりよはさるる

称朝衡

名を
朝衡

と改め日朝長仲
麻呂を切切とす

友李王

李白王維ハ乃名をよん
と名をよん 唐に在る五十餘年

異域其名芳

青海原よりさけさるる春日の心
年一月もとり歌ハ仲九皇国よかへ

らむ。明州より所々機せし船中にてよみし。ついで
てて難ぬ。二途よりついでに磨り。室龜元年の事
を唐代宗潞州大都督
とりよけををねらむ。

又即ハ
詔萬民
讀孝經
孝道新
天保勝室元年天
下よみしもの。下

あつに孝経を備へつゝよみせし
しめ孝道ありつゝ強つ。桓武朝
市名ハ 倭根子皇
統跡照天皇と申

都と山城の平安
京遷り移つ。有對策
試人才
峯巨臂
大学寮
明徳紀傳

明法算の四道あり。学生を試るを對策といひ。撰中
策といひ。者より。法算といひ。是も人オと奉はの
古昔乃名臣。賢相より。管公と首りて奉らむ。

多る人けり。子巨臂と名其かりしもの。弘仁人
有非常
弘仁ハ 嵯峨帝の年号也。世所代
おハ僧侶といひ。人オと奉らむ。

佐伯氏なり。入唐して。青龍寺の惠果。小野篁
密教とて。法書ありて。文あり。弘法と諡を。篁ハ小野
宣參議大弁と云。福ま。管名家
出管公
管家ハ 以家と
よんに歷代乃

傷宗ハ 菅公ハ 菅原是善。明の男。贈正一位
左大臣。通真公。た。菅公と申す。公、文學冠
日東
乃 鴻儒ありし。いへ。菅公の文學ハ 對する人なり。

忠誠無比。千歳。備食。紀貫之
古今集
御書所預記
貫之 大内記

兼へ。其國。徒。仰。し。紀貫之
古今集
貫之 大内記

紀貫之。前甲斐。目凡。河内。躬恒。右衛門。府生。壬生。忠峯。亦
五人。延喜。五年。古今。和歌集。廿卷。を。ま。して。ま。たり。

五。人。延喜。五年。古今。和歌集。廿卷。を。ま。して。ま。たり。

五。人。延喜。五年。古今。和歌集。廿卷。を。ま。して。ま。たり。

五。人。延喜。五年。古今。和歌集。廿卷。を。ま。して。ま。たり。

所不及

能登守源順ハ、嵯峨天皇乃御商和名類聚抄
廿卷と云ふ博學多識及少なき抄なり

書

通風

小野篁河の孫右衛門
大貳葛絃朝臣の子

及佐理

左兵衛佐藤原佐理ハ
權中納言教忠師三男

併行成

九條權政伊予公孫中納言
世尊守家の祖なり

三蹟美

世三人の草紙
を三蹟と云ふ

清原

清原元捕の女一條帝乃
皇后宮の女房枕双紙と云ふ

才女子

著源氏作雙紙

清原少

細

道長

不脩徳

藤氏盛

至世極

藤道長

公法與院

園白

法成寺

權政と梅守

朝政

朝政

朝政

皇太后と云ふ外戚の權を恐る事 朝廷の衰微ハ
藤氏乃專權と佛法の隆盛とに云ふ
中納言大江匡房卿世ハ江帥と梅も博學多材に
はく書を著せし 就中テ江家以弟サ一巻 秘要乃
義家學 察雁翔 漸義家 朝臣 匡房卿又學を受く
曾て兄頼義朝臣と後ハ清
武衛 衡を 雁の行を 梅も
をみて 伏兵あると知り 勢を 助る
平相国の長子 因之 世ハ
小松内府と梅も申分の 人ハ
憂君父 忘其身 後白河法皇の 幽閉を ちかぎ 清盛
いさめ 君を 平氏 亡 失 斯 人 小松内府 亮 宗盛 皆思
かゝる 事 あり 平氏 忽ち あり

江匡房

義家學

察雁翔

漸義家

朝臣

匡房卿

武衛

衡

雁

梅

平

重盛

平相國

長子

因之

世ハ

小松内府

亮

憂君父

忘其身

後白河

法皇

幽閉

を

いさめ

君を

平氏

亡

失

斯

人

小松内府

亮

宗盛

皆思

あり

かゝる

事

あり

平氏

忽ち

あり

二月

平氏

亡

失

斯

人

源頼朝 執朝政

頼朝卿は義朝の子爲義の孫平氏がうち亡しはひに朝柄をふかせるも

皇綱解 将權盛

大江廣元が謀界をもち執朝の六十位母の總進補位を然るより朝權盛

東鏡者 鎌倉史 述事實 見減否

東鏡者 鎌倉史 述事實 見減否 鏡五

十二巻鎌倉將府累代の形跡あり 高倉帝が治業四年を

朝廷乃大なるハ 北條氏有義時克其欲去其私條

義時ハ時政の孫義時乃子鎌倉の執權ありてよく使約を守

係り日 完式目 富蔵規 集し政事の権絶とを

後醍醐親執政

高時と謀し鎌倉を亡し王政改

後古一たたり物をも隠して且利を氏を用か終に謀を

信し後良親王を因一義貞正成等の法将力を伸る

事ありて吉野乃行宮ふ 雖南遷 皇統正 氏南松

を因か北朝の天子をまると 正成賢能 用兵 後醍

復興の時一人孤城を守りて不屈強敵を亡し且利を

徳を考氏兩上の後討策用らる皇位一 湊川に戦

死し今も西の方人みれ返を 盡精忠 如孔明 撫

精日月を愛よ義烈天地を流雲

子正行 尋北征

子志維不滅 同天地存業名

捕公遣非遣使左衛門尉河内守とる

伯父の遺志を傳へて櫓まるといふも南軍振まを空しく河内四條に戦ふ時二年廿三子孫絶孤立して是利は降らば下旗みれ忠義も死も和漢古今比影あるのみ竹馬の童子といつども楠家を追慕せざるまはなり。嗚呼義勇

長い立むも 尊氏興以作力及其亂骨肉食

源氏氏已が者み君と立てて之を無蔑し大塔宮平直冬と我に相違無道幸ふく死を全はるといふも奥の大名と乃我の如く又か契不我乃我終止の時 至信長殆少康満招損 六十州終分裂相枕衛我不輟 且利の末六十

乃我終止の時 至信長殆少康満招損

羅算弒 織田信長公威武を以て乱を搦ひ国内稍治す 赴く不事ありて明智光秀が弒逆のめは

相違甚ゆ劣り報い 秀吉知維無以厚税欽耽

奢俊 豊臣国白多智子よりよく武を用ゆ終る卒内と 手記も好く長末大藏が策を用ゆる地を換し

親をも重し大度ふ 好戦伐役多士其家亡無

糸子 親を重し大度ふ 好戦伐役多士其家亡無 積善

家有餘慶 初めく善子を換めバ 積不善有餘殃

身の行ひよからぬを
おのらざる己ぶるあり

憂勞與

勤勞怠らば身は
身も立あらざるを

逸

無亡

わが業をばもつて
たれがそのおほろふ

慎厥終

靡不康

法身

眼と着まは心を
学もろく妙し

盛衰理

人事彰

善を身はけつを
悪はほろふ力

を身もまは後あ
なれはかぬを

讀之者

莫勿忘

此書の趣

心よとめくたこ
もろくもろく

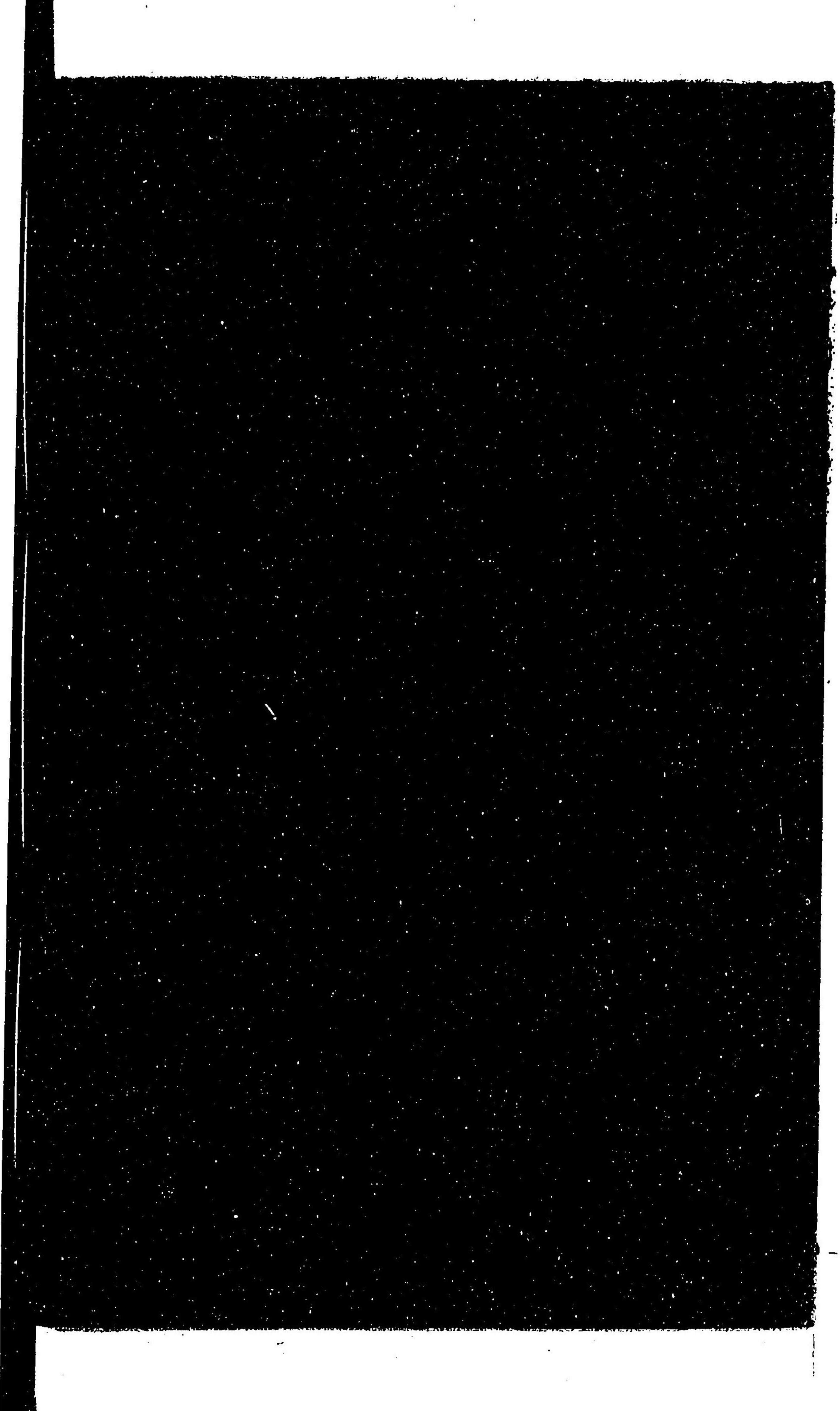
汲古堂著書弘通所

大阪心齋橋筋本町

赤志忠七

同所安土町

鹿田静七



特42
134
函架三六册
本

071978-000-9

特42-134

略解本朝三字經

赤志 忠七

鹿田 静七

M 6 序

CED-1735

